

久野城

— 平成 6 ・ 7 年度発掘調査概報 —



1996

静岡県袋井市教育委員会

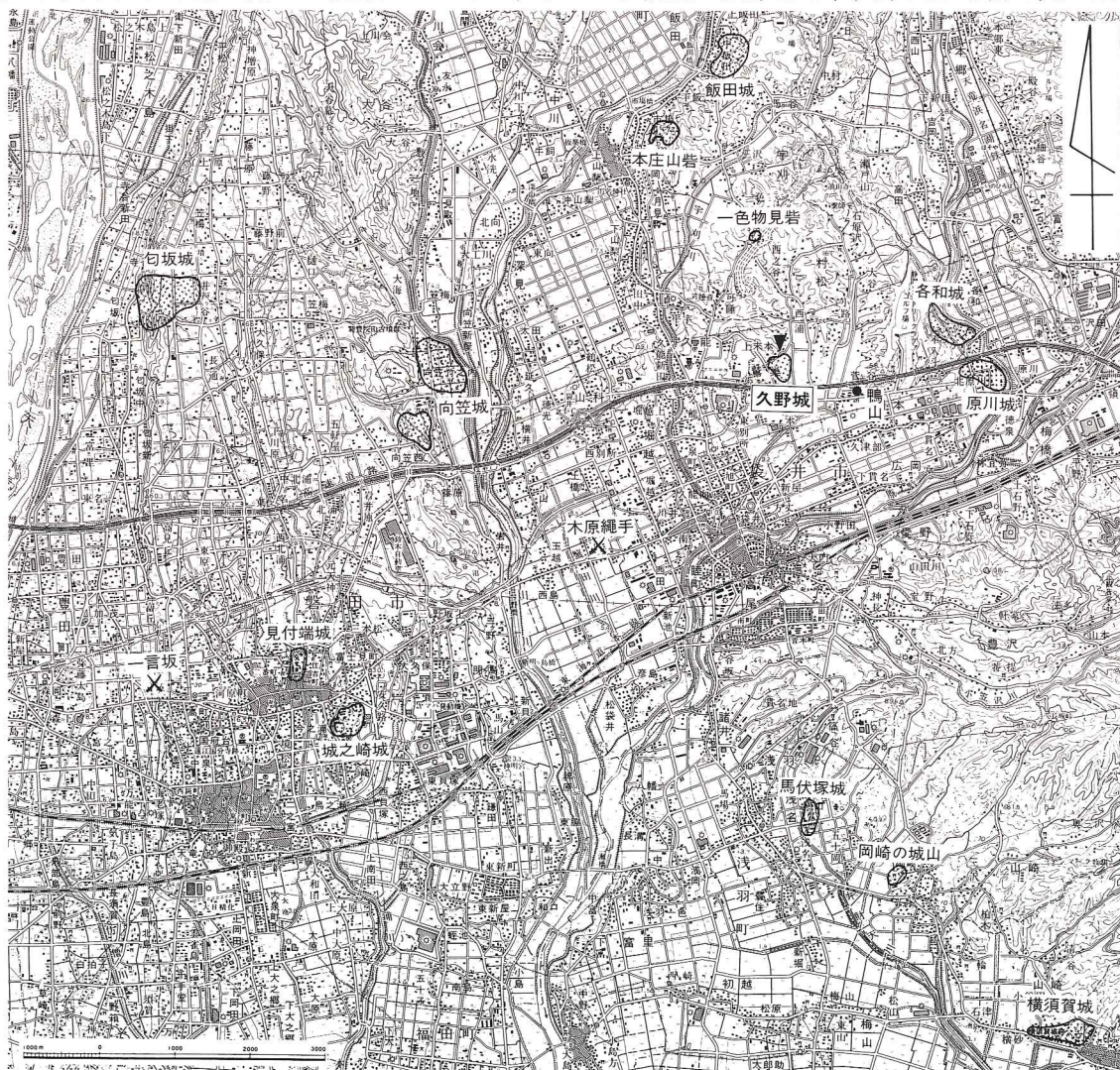
例 言

1. 本書は静岡県袋井市^{わしず}鷺巣^{くの}に所在する久野城の発掘調査概報である。
2. 本書は平成6・7年度国庫補助金、県費補助金を得て袋井市教育委員会が行った。
3. 本書は平成6年8月22日から平成7年1月11日（平成6年度事業）に実施した推定大手地区の北半と平成7年8月21日から平成7年12月1日（平成7年度事業）に実施した推定大手地区と南の丸と
の中間地域の発掘調査成果である。
4. 調査と本書の執筆は白澤 崇が担当した。

I. 調査に至る経緯

1993年3月に発行した『久野城Ⅳ』では平成元年・2・3年までの調査で蓄積されていた成果に加え、平成4年度における調査成果を基に考古・文献両面から新しく久野城全体を捉え直した点で、重大な画期となった。この中で、大手について「今年度（平成4年度）の発掘調査により、東側枳形が大手口であることが確定的となった。～《中略》～大手口前面に「馬出し」を置き、「虎口」は、90度に折れ曲がる道を多用している。また「隅櫓（着到櫓）」「門（高麗門）」「堀（折堀）」の位置など、～《中略》～織豊政権下の城郭の特色を顕著に残している。」と指摘している。

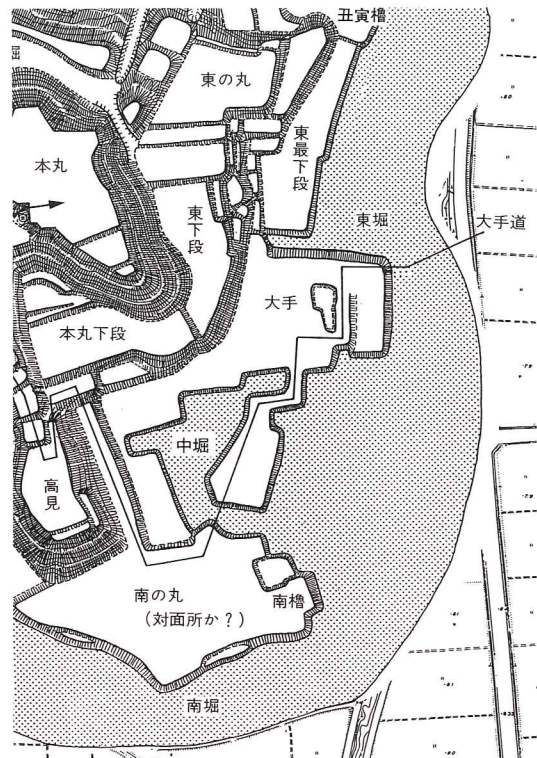
更に、大手口から南の丸への経路については、トレンチ調査の成果から、大手口から南の丸へ至る間



第1図 久野城跡位置図 周辺城郭分布図（永禄～慶長年間）

に半島状に伸びる整地土による曲輪が形成されており、その南端は南の丸と隔絶して橋で繋がれていた可能性を指摘している。こうした半島状の曲輪によってその西側には中堀が複雑に這入り込む状況となっている。(第2図 参照)

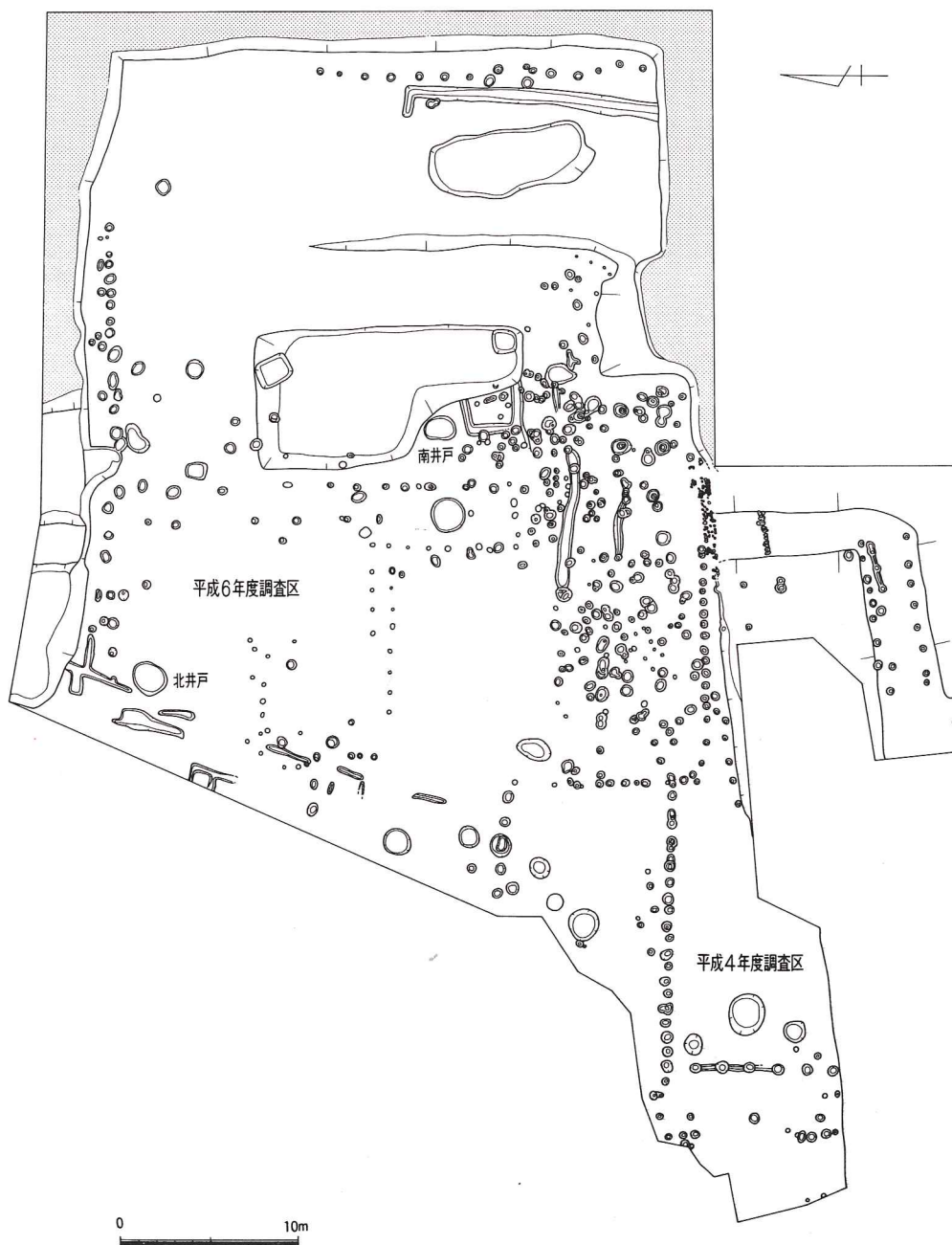
以上の成果を踏まえ、①大手口と想定した平成4年度の調査区の北半がどのような状況であり、大手門そのものの位置の確定を遺構的に追うことができるのかと、②大手口から南の丸へ至る経路上に位置する、整地土によって形成された半島状の曲輪の平面調査を実施して堀・柵及び橋脚の有無について確認すること、更に平成4年度までの大手口から南の丸へ至る経路が史実に合致し、従来予想されているように南の丸が対面所的な役割を果たすとすれば、どのような規模の建物等が存在するのかの追及のため、①を把握するために平成6年度に、②を把握するために平成7年度にそれぞれ調査を実施することとした。(第3図 参照)



第2図 従来想定していた堀と曲輪の関係



第3図 久野城跡地形図 発掘調査地点



第4図 平成4・6年度調査区全体図



平成6年度調査区全景（西から）



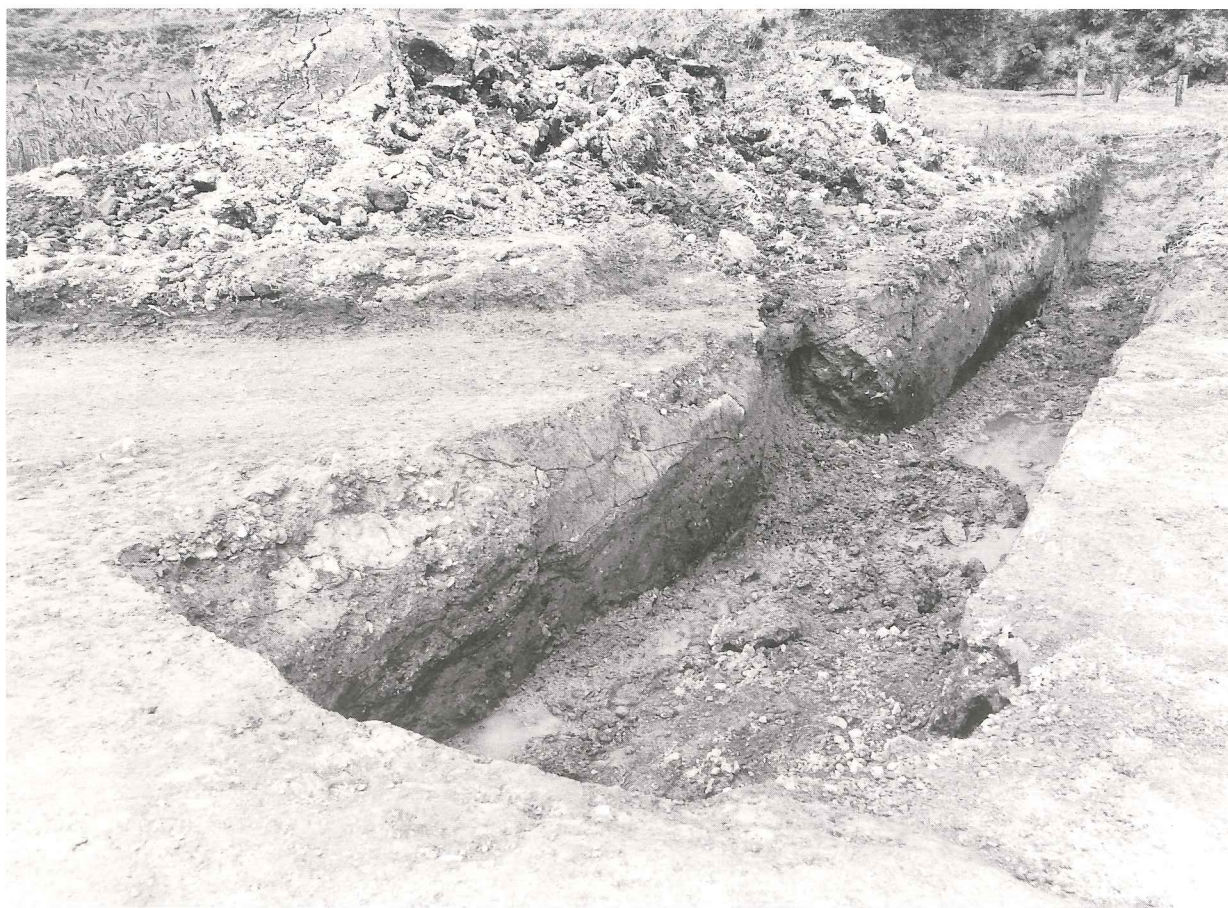
平成4・6年度調査区全景（東から）



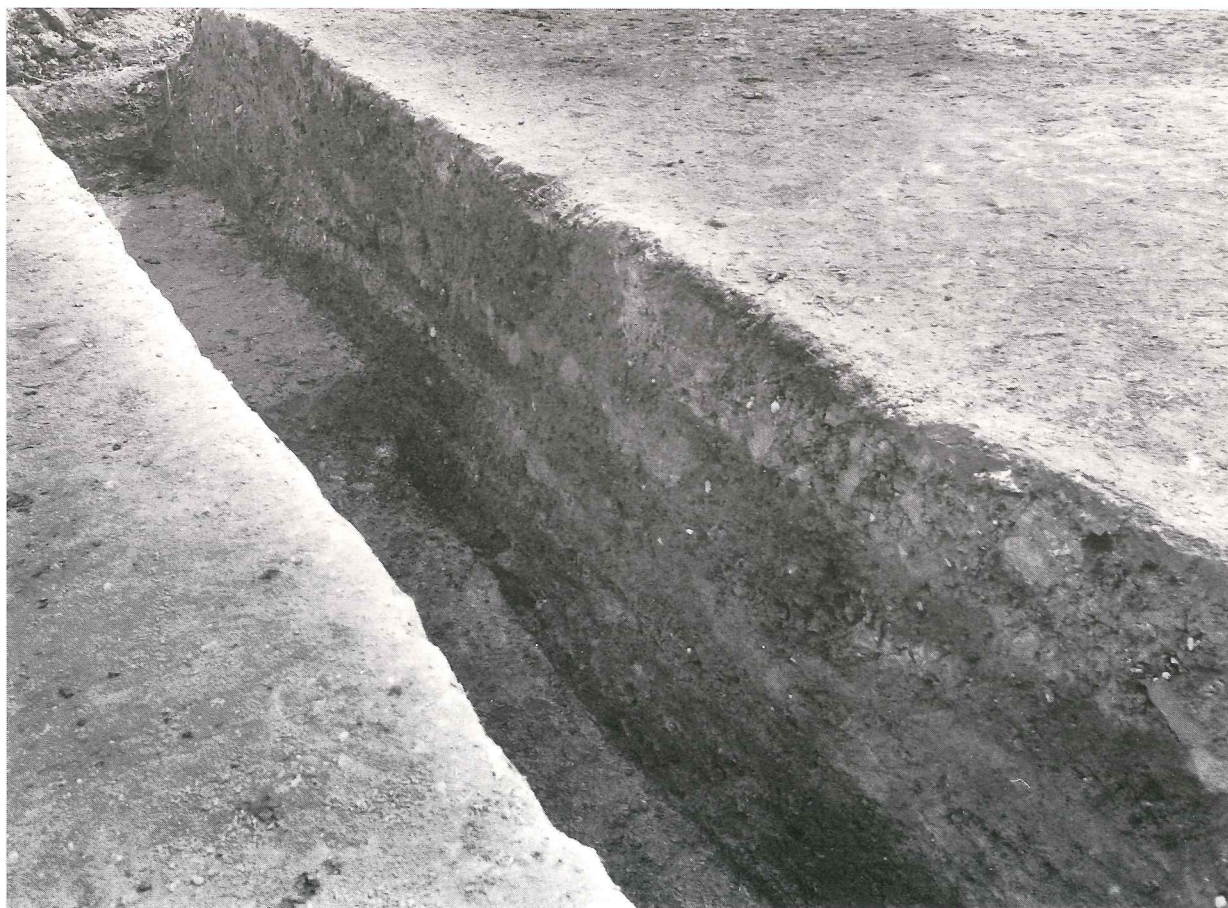
平成6年度調査区北半（東から）



平成6年度・柱穴列完掘状況（北から）



平成7年度・Cトレンチ土層断面（東から）



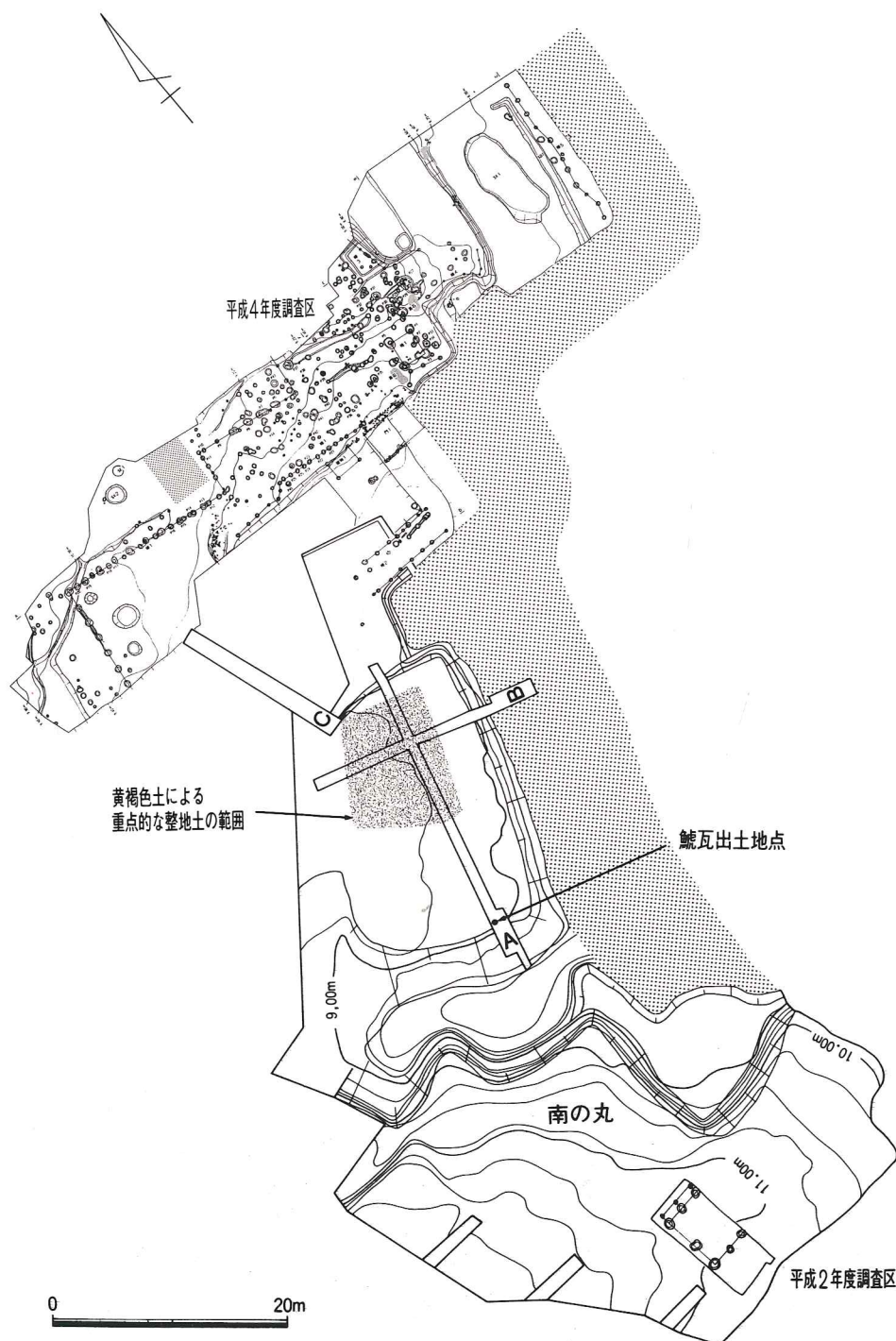
平成7年度・Bトレンチ土層断面〔整地状況〕（西から）



平成7年度調査区全景（西から）



平成7年度・黄褐色土による整地土の検出状況（西から）



第5図 平成7年度調査区全体図

II. 遺 構

【平成6年度調査区】（第4図 参照）

平成6年度の調査区は、4年度調査区の北側に位置しており、以前より茶の改植によって遺構の保存状況が比較的悪い所とされていた。実際調査を行っていくと、4年度に遺構を検出した面と同一レベルにまで重機の掘削痕が残っていたが、その難を逃れて僅かに残った柱穴底面が確認でき、柱根を採集できたものや、柱穴が列をなすものが存在した。但し、4年度の調査で明瞭に確認できた90度に折れ曲がる堀と推定される柱穴列と今回検出したものは接続しない。ただ、東西南北の方位を意識したように合致する列の方向は、6年度検出の柱穴列も同じであり、関連性が強いものと判断される。加えて、直径2m前後で深さ2m以上の土坑を検出した。この土坑には、多量の人頭大ほどの石とともに、瓦片が詰まっていた。木製の枠は検出していないものの、井戸として利用していたものを廃絶した状況と判断される。（詳細な整理を行っていないのでこの遺構を便宜的に、調査区北で検出したものを北井戸、南東隅で検出したものを南井戸とする。）

【平成7年度調査区】（第5図 参照）

先項でも触れたように、当該調査区は平成4年度までの所見から第2図のような中堀が細かく取り巻いた、大手から半島状に伸びる曲輪という認識をしていた。調査を行っていく中で、平面調査を行ってもまったく柱穴等の遺構を確認できず、十字方向に設定したトレンチによって構造を確認する調査へ切り替えざるをえなかった。そうしたところ確かに以前の認識どおり凡そ1.5m前後の整地土によって成形されていることは検証できたが、中堀部に設定したトレンチ（第5図C）の断面観察からは中堀想定地区にも整地土が広がっている可能性が高いことが新たに浮かび上がってきた。

また、黄褐色土による8×10m前後で厚さ30～40cmの重点的な整地が行われている範囲があり、この部分に礎石建物が建っていた可能性があり、遺構検出のみにとどめた南の丸においても、ほぼ同規模の7×9m前後の掘立柱建物が平成2年度調査区から東に広がっていることを確認した。

III. 遺 物

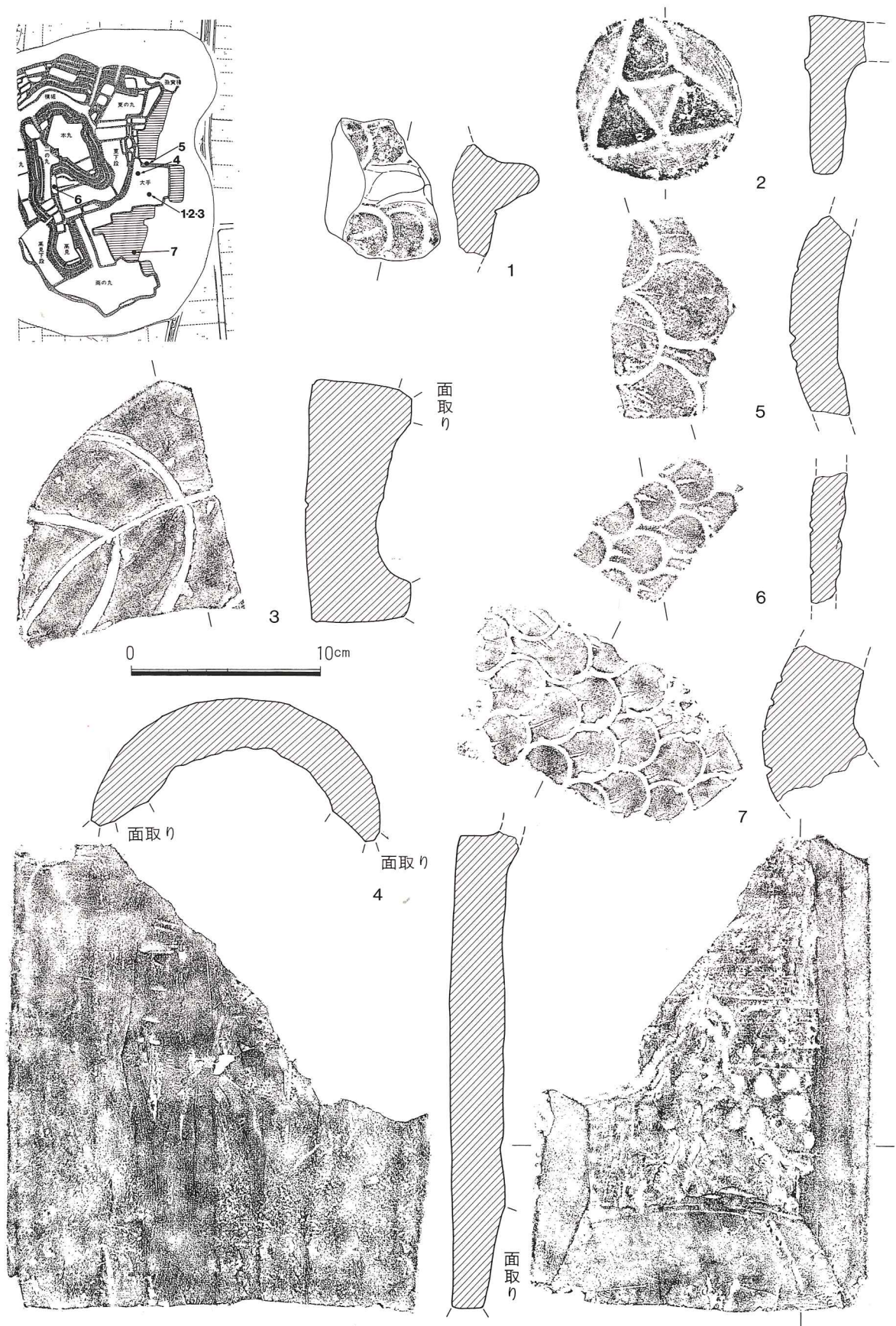
【平成6年度】（第6図1～5）

まず、1～3は南井戸から出土している。1は摩耗しているが、鯨瓦の細片と考えられ、ヒレの突起の部分が僅かに残っている。2は「三鱗紋」の練込瓦である。最後の城主となる北条氏重に関係した瓦と考えられるが、平成元年以来の調査で家紋の入った瓦は今回が初めてである。3は桐紋鬼板瓦の破片である。葉脈を沈線によって表現しており、裏面はナデによって調整している。

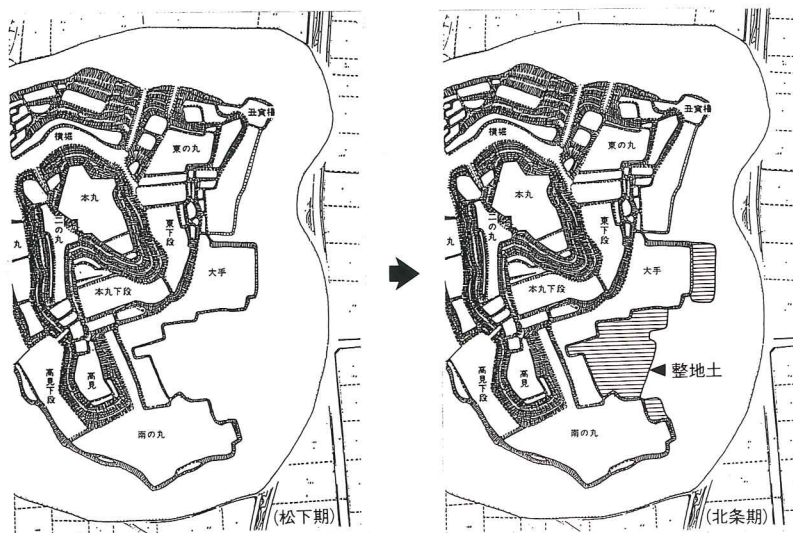
4～5は北井戸から出土している。4は丸瓦で凸面には縦方向に工具による調整痕が明瞭に残っている。側縁部と玉縁部の端部には、それぞれ面取り状の調整が施されている。凹面には所謂コビキBと呼ばれる調整痕が確認できる。未整理の部分もあるが、この調整痕に限った場合、先の北井戸と南井戸の瓦を観察すると、コビキAとコビキBが混在して出土している。但し、同じ推定大手地区の平成4年度の調査ではコビキAのみ出土しており、コビキBの手法を残す瓦の出土は平成6年度の調査によって初めて確認できた。5は先の1の鯨瓦の鱗に比べやや大振りの表現をしており、鱗の中央にはヘラ先で一条の線刻を施文している。

【平成7年度】（第6図6～7）

6は調査中に、たまたま二の丸の東斜面で採取したもので、鯨瓦の細片であると考えられる。鱗の大きさや表現方法は1に近似する。7は発掘調査によって出土したもので、泥炭層と整地土の間から出土した。鱗の表現方法は前述来の鯨瓦と同じで、おそらくスタンプ状の工具で鱗の輪郭を表現しているものと考えられる。



第6図 出土瓦実測図



第7図 調査成果から予想される曲輪と堀の状況

IV. まとめ

まず、調査成果をまとめるにあたり、久野城の歴史の概略について、天正18年(1590)に松下之綱が入城し大改修をした時期を含めて慶長7年(1602)までを便宜的に松下期とし、北条氏重が元和5年(1619)に入城し、正保元年(1644)の廃城までを北条期とする。この前後の明応元年(1492)から天正17年(1589)までを前期久野氏、慶長8年(1603)から元和4年(1618)

までを後期久野氏として、その歴史を大略四時期に分けて考えてみることにする。

久野城は築城後、松下期に初めて瓦葺きの建物に変わったことが調査によってほぼ明らかとなっている。このことから、平成7年度の調査区の整地土下面から出土した鯱瓦(第5図7)は、恐らく松下期の主要建物に関わる瓦であると判断されるとともに、時期の特定のできる資料となる。また、その他の鯱瓦も層位的には断定できないが、少なくとも松下期から北条期のどこかであることは確かであり、50年幅で時期を特定できる資料として貴重である。また、三鱗紋の練込瓦も所謂家紋瓦とは性格が若干違うものの、北条期の瓦としての時期の特定ができることと、これによって家紋を入れた瓦の成立年代が従来より(加藤 1993 a) 古く位置付けることも可能となってくる。

また、平成6年度に検出したコビキBの手法の丸瓦の存在は、平成4年度の調査までで松下期の瓦と判断されるものの中には存在しておらず、恐らくは北条期のものであると考えられる。とすれば、正保年間(1644~48)に静岡県内の瓦もコビキAからBへ転換したとする説(加藤 1993 b)よりも以前の北条期(1619~44)にコビキBの手法が存在することになり、重要な資料を提示できることとなる。

遺構では、従来の大手口から南の丸に至る経路の堀と曲輪の関係(第2図)を大きく変えざるをえない所見が得られた。つまり、第7図に示したように、大手口と南の丸の間は当初、コの字状の堀によって分断されていたが、次の時期にはこの間を整地土によって埋め立て、何らかの用途のために使用していたことが明らかとなった。整地土内に瓦片が混じることから、第7図の左の時期を松下期頃までの状況、第7図の右を北条期のものと想定した。

最後に、平成4・6年度の調査によって、大手門そのものの存在は確認できなかった。しかし、今後資料整理を進め、久野城の全体像について再考したい。

(註) 加藤理文 1993 a 「静岡県内における家紋瓦の成立」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
1993 b 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会